'87.5.

児童文学

最首悟

児童文学の第一水準・第二水準

カニグズバーグの作品から考える

□――――□
〝特異な〟大人の中で

この欄は日本の作品をあつかう約束になっているのだが、時に逸脱も許してもらおう。

カニグズバーグの『800番への旅』（岡本浜江訳、佐学社）を読んだ。「ぼくのお父さんは、お母さんにとって『あなたのお父さん』で、ラクダを飼っている男だ。お母さんは、そのラクダのせいで離婚したのだ」という出だしから、さすがに一気に最後まで読んでしまう。ラクダはほんとうにひとこぶラクダなのだが、ラクダが意味するもの、ラクダに規制されるアメリカでの生活の意味は重層的に広がっている。ラクダは怒ると、「四本の足でさっと十二方向にけっている」というような描写は、全くの即物的なのだが、やっぱり意味がまといついている。カニグズバーグを読む楽しみの一つである。

『800番への旅』という題もそうだ。この電話番号がアメリカでは、電話ショッピングや電話案内の統一された番号で、うけこたえしてくれる人は何千といるのだろうが無名性の淵に沈んでいる、ということがわかっても、むずかしい。「への旅」とは何だろう。

主人公の男の子は、金持と結婚する母親の新婚旅行の間、別れた父親の元へ夏休みを過しに行く。父親のことをいいなあと思いはじめたら、実の父親でないことがわかってくる。

六八、九年、母親がヒッピーのようにしてメキシコの田舎に流れ、ヒッピーのたまり場のようになった家の主と結婚したとき、すでに妊娠していたのだ。遺伝子の半身である父親は無名性の中に溶けている。

ヒッピー的なるものをブーメランのようにかすめて、スノッブ的な「ふり」の世界にもどって行く母親と、父親役も買いて行かれたラクダも引き受けて、悠揚とラクダを連れて奥行してまわり、いろいろな場で人に好かれる男と、母親の友だちのヒッピーで、いまはそのまま自然と有名になった太った女の歌手と、そして800番の受け手で、夏休みに女の子と二人でアメリカ特有のいろんな業種業界の大会に、「ふり」をして乗りこみ無料で楽しむ母親と、この四人の大人は、特異でありながら特異であるよりも、この日本の私たちと充分に近い存在である。

この四人を背景において、ブーメラン的母親の子の男の子と、「ふり」師的母親の子の女の子が出会い、議論をする。

「けど、レネーは生れつき、どこかおかしかったんじゃないよね。事故の犠牲者だろ。だから今だって正常な人生送っているじゃないか」「あれは正常とはいえないわよ」「自分に起ったことに、打ち勝とうとしているもの」「打ち勝とうとすることは、正常じゃないわよ。自分がしたいと思うこと以上に、つねに何かしてなきゃならないわけでしょ（略）」

カニグズバーグは、無名と実名、正常と異常、「ふり」ができる自由と不自由について、いや気がさきないやり方で、どちらかというと立ち向う流儀で書いていく。前作『ジョコンダ夫人の肖像』（松永ふみ子訳、岩波書店）では、レオナルド・ダ・ヴィンチのあの秩序の維持・完成には、ワイルドを体現する者、ワイルドを理解する者がそばに居ることが不可欠だった、ということに取り組んだ。

□――――□
「子ども」に向う回路

カニグズバーグを読んでいると、どうしても児童文学の第一水準、第二水準というようなことに思いがいく。

第一水準とは、「子ども」をあつかうことによって、純文学では不可能になってしまった希望や願いを根底において作品を提出し、渇いた読者を満足させることである。このレベルでは読者の想定はなされない。まあ、たいがいは、大人か今流にいえばヤングアダルトだろうが、限定はしないのである。どういう読者かが問題なのではなく、「子ども」を主役として登場させることが重要であり、「子ども」とはいかなる存在か格闘するところに本義がある。ただ、大枠での「子ども」は成長するとか、「子ども」に性愛の世界がないなどという仮の前提が可能なことから、希望や未来や立ち向いをバックボーンにすることができるのである。

第二水準は、これは至難の技である。読者は子どもであるという限定がなされる。ある作品が第一水準をスキップして、このレベルに入ってくることはおよそできない。第一水準のふるいにかけられて、その上で時間に耐えて、子どもの読者に迎えられたという評価を得ることになる。しかし、なにゆえ迎え入れられたか、ほんとうのところはわからないのである。この間も、「子どもの、子どもによる、子どものための」世界という意句を見かけたが、それは「人民の人民による人民のため」という意味の難解さをはるかに凌駕する深淵なのであって、とてもじゃないが気楽にいえることではないのだ。

カニグズバーグを読んでいると、彼女の作品群は、第一水準を通過して、第二水準へ向うだろうなあという予感がする。そしてこの予感があることによって、逆に私は、「子ども」に向う回路が、見えないけれど全く断ち切れているわけではないという一筋の光明を見るのである。

□――――□
切実さが伝わる

電話と離婚という点では、共通点をもつ『日曜日のテルニイ』（竹内もと代、学習研究社、一九八七・四）を今月は挙げる。

テルニイとは、電話のテルと兄さんのニイだとわかると、なんだかがっかりしてしまうし、『800番への旅』の女の子が、「誰だって離婚ぐらいするじゃない」というのにくらべて、離婚はどの場合も子どもには多かれ少なかれ不幸だ、という作者のあとがきを見ると気がなえてしまうが、それでも、ある切実さは伝わってくる。ただし、だんだん謎が解けて、父親と女の子の間におこるある種の感応現象というように話が理に落ちていくことによって、「わからなさ」への迫り方がトーンダウンしてしまう。腑に落ちない間の、主人公の女の子にしか見えない少年の登場が初々しい。異性が父親に似て登場してくるのと、父親が少年の姿で現われてくるのとの錯覚が切実で、大人を楽しませる。（さいしゅ・さとる氏＝東京大学助手・生物学専攻）